様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　４ 月 ２９ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2022～2023
課題番号：２２Ｋ１９９７３

研究課題名（和文）カント様相論の体系的整理に向けた研究

研究課題名（英文）A Study Toward a Systematic Classification of Kant's Theory of Modality

研究代表者
繁田　歩（Shigeta, Ayumu）

早稲田大学・文学学術院・助手

研究者番号：８０９６１６２２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目標はイマヌエル・カントの術語としての「様相」が、どのように理解されるべきであるかについて再検討することであった。彼の概念使用は、認識論、形而上学、論理学という三つの異なった領域を自由にまたがっており、このことは曖昧性の温床であるように思われた。本研究では、カントにおいて対象の現存在は様相的現実性であること（論理学と形而上学との融合）、そして真とみなすこと論については認識の現実性が論じられること（認識論と論理学との融合）が確認された。そのうえで、それら三つの分野にまたがりうることこそが、カントの批判哲学の特殊性であることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的意義は、今日の哲学からカント哲学を振り返ったときに見出されうる可能な曖昧性に解決の糸口を見出したことであった。カント哲学は現代でも影響力を持つが、18世紀の思想であるという時代的な制約を負っている。そのため、カントが知りえなかったような概念区分というものも今日では存在しており、そのような一見した曖昧性がカント哲学の魅力を低下させる一因となっているのである。このような現状を踏まえて、本研究では現代の様相形而上学や現代認識論の議論を援用してカントの概念使用を明確化しる解釈を提示することを試みた。このような成果は西洋哲学の古典を正当に評価するための学術的・社会的意義をもつであろう。

研究成果の概要（英文）：This research project aimed to reexamine how "modality" as a terminology of Kant should be understood. For his conception of it seems to straddle three distinct disciplinary areas; epistemology, metaphysics, and logic. And this could be a source of dangerous ambiguity. In this study, it was shown that the existence of the object is a modal actuality in Kant (merging logic and metaphysics), and that the actuality of cognition is discussed in terms of the theory of the holding-to-be-true (merging epistemology and logic). It was then clarified that the possibility of bridging these three fields is the peculiarity of Kant's critical philosophy.

研究分野：西洋哲学

キーワード：イマヌエル・カント　現代認識論　様相形而上学　批判哲学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

時代を問わず哲学において可能・現実・必然という様相述語は根本概念のひとつであり続けてきたことについては疑いの余地がないであろう。18 世紀のイマヌエル・カント（1724-1804）もまた、彼の主著である『純粋理性批判』では、可能性・現実性・必然性という三つの様相を「カテゴリー」つまり「純粋悟性概念」に数え入れている。つまり、様相という概念はすべての概念や判断の根底に存するような、基幹的な概念だというのである。

カント哲学は現代にいたるまで、西洋哲学のマイルストーンとみなされてきた。このことはカントの没後 200 年以上が経過した現在においても、彼の思想が批判や研究の対象とされ続けていることから明らかである。しかし、彼の哲学的態度の性質を正確に言い当てることは困難であり、このことは先に挙げた様相概念の正確な意義について合意を形成するも困難としている。実際に、カントの議論している「様相」という概念は、命題の真理性に関係する「論理学」における様相とも、存在者の可能性や必然性に関係した「形而上学」の様相とも、知識や信念の可能性や現実性に関する「認識」の様相とも部分的には一致するが、完全には一致しないという奇妙な特徴を有するからである。このことは、カント哲学が論理学なのか認識論なのか、それとも形而上学なのかとい問いが容易に答えられないという事実を反映しているといえよう。

この問題について、これまでのカント研究者は様々な研究によって考察を深めてきた。例えば、Barber（1954: “ Two Logics of Modality ”）は、カントの様相概念を「真理様相」ととらえ、とりわけ今日の様相論理におけるもっとも要求の少ない公理系である「S1」に一致することを示そうとした。しかし、彼のようにカントの様相を厳密な真理様相と解する解釈態度にはある重大な問題が潜んでいる。というのも、カントは「カテゴリーの諸概念は判断表から直接に導かれる」ということを、「形而上学的演繹」という名のもとに明言しており、このような基本的なテーゼに反する Barber の解釈は問題含みであるといえるのだ。

また、Mattey（1986: “ Kant ’ s Theory of Propositional Attitudes ”）のようにカントの様相概念を「認識論」のそれとして再解釈するこころみもなされてきた。Hintikka（1962: Knowledge and Belief）において、彼は様相論理とも密接に関連する「認識論理」を提唱した。この Hintikka の議論を踏まえて、Mattey はカントにおける様相とは単なる真理様相ではなく、むしろ認識主体が命題内容に対してもつ賛同態度についての区別であると説明した。しかし、彼の考察もまた、根本的な点で問題を抱えていた。それは、このように命題内容についての賛同態度として、様相を理解した場合には、カントが「判断の様相は判断の内容にかかわらない」と明確に述べていたという事実が説明できなくなるからである。したがって、カントの様相概念を認識論に一致させることも、即座には受け入れられない立場である。この点については、すでに Leech（2012: “ Kant ’ s Modalities of Judgements ”）が指摘している。

では、カントは存在者についての形而上学的意味での様相を論じているのだろうか。この路線を採用して、カント哲学を再考したのが Stang（2016: Kant ’ s Modal Metaphysics）である。この研究では、カントにとって「現存在 Dasein」という概念は、様相における現実性に一致するという事実が注目され、存在についてのカントの説が様相の論理を背景に再構成されたのである。つまり、カントの論じている様相は、存在についての、可能性、現実性、必然性だというのだ。この様相形而上学的な解釈において、Stang は存在することを量化子の変項の値となることだと理解するクワイン主義を前面に押し出した検討を試みた。その結果として、カントにとっては、可能だが存在しない対象のようなものはありえず、存在する以上は現実的であるといういわゆる「現実主義」の解釈が提唱された。しかし、Stang の理解にも問題がないわけではない。というのも、カントは数々の文脈において、存在しない可能な対象について言及しているからである。この点に注目して Stang とは異なる解釈を試みたのが Rosefeldt である。彼は、カントが可能的対象に言及する際には、今日の分析哲学において「マイノング主義」と名指されるような、非存在対象を容認する立場が反映されるという新たな形而上学観を提示することで、Stang の現実存主義的解釈に対立している（Rosefeldt(2020: “ Kant ’ s Logic of Existence ”)。

以上に見てきたように、カントにおける「様相」の概念は、それが論理・認識・形而上学のどれに属する考察として解釈されるべきであるかについて、曖昧性を残しているのであった。この問題を本研究では「様相概念の曖昧性」として特定した。なお、この曖昧性がカント研究の文脈において看過しえない課題となる理由は次の二つである。第一に、もし様相の曖昧性をそのままにするのであれば、カントの理論哲学の目標それ自体が曖昧なものとなってしまう。カントは彼の理論哲学が「我々の認識の可能性の根拠」を探るものであると説明しているが、ここにいわれている可能性というものが、認識の成立についての論理的可能性なのか、認識行為における信念形成の可能性なのか、あるいは認識される対象の形而上学的な可能性についての考察なのかは依然として不明瞭なのである。このような事実を野放しにする場合には、カント哲学の展開は根幹から揺るがされてしまうだろう。第二に、もしカント哲学に「様相概念の曖昧性」が潜んでおり、それを現代の哲学の一般的な学問区分である論理学・形而上学・認識論という三つの観点に整理できないのであるとすると、彼の思想体系は今日的にみて魅力に欠けるといわれてもおかしくない。この問題点は、カント哲学研究を単なる文献学的な営為とみなす場合にはさしたる問

題ではないだろう。しかし、まさに現代のカント研究者が目指しているのは、カント哲学を今日の我々が生きる世界において有用に取り扱うことである。その場合、カント哲学に隠された曖昧性は、現代の哲学的な見地によって再構成されるべきなのであって、それができないような論点が隠されている場合には、彼の思想はもはや今日では通用しないようなものとなるだろう。

以上のような研究上の背景を受けて、本研究ではカントにおける「様相概念の曖昧性」を可能な限り解消することを目指して研究を進めてきた。

２．研究の目的

上述の可能な困難に対抗するために、本研究では、様相に関するカントの記述を論理学・形而上学・認識論それぞれの文脈に整理したうえで、それらの体系的な関連性を論証することを目指してきた。特に申請者が注力したのは、カントの様相についての記述を、今日の哲学的な知見を踏まえてより明晰に、魅力的な仕方で理解する方途を示すことであった。というのも、様相という哲学的な概念は、歴史的なテーマであるとはいえその論理的な構造については 20 世紀になってから様相論学の発展に応じて解明されてきたのであるし、それを受けて様相形而上学や認識論理が展開してきたからである。したがって、本研究の具体的な目的は次の二つである。

第一に、本研究はイマヌエル・カントの著作における「様相」についての用語法を再検討するとともに、それを論理・認識・存在というそれぞれのテーマ性に切り分けて理解可能にすることを目指している。第二に、本研究では、そのような整理をする場合には、現代の哲学の知見をふんだんに活用し、さらに最終的に提示されたカントの様相理解が現代哲学からみても理解可能になるようにすることも目指した。つまり、本研究はカント解釈の内在的な視点と、より広い哲学一般の観点との両方に目配せをすることをその目標としているのである。

３．研究の方法

上の項目で言及したように、本研究の目的のひとつはカントの現代的な意義を再構築することであった。したがって、本研究のとった方法は、「分析的カント解釈」という 20 世紀後半に発達した新たな研究方法であった。この手法はテキストの整合性という文献学の基本的価値を他の伝統的手法と共有する一方で、たとえば様相については Kripke（1963: “Semantical Considerationson Modal Logic”）によって体系化された今日の「様相論理」を援用することで、従来とは別の視点からカントの様相論を再検討してきた。分析的カント解釈が提示してきた先行研究の成果は、現代の哲学者からも参照できる「新しい古典」としてのカント哲学を浮かび上がらせることに寄与してきたといえよう。特に Stang（2016）を受けて、カントの様相論は論理学・認識論・そして形而上学を横断してカント研究者の注目を集めている。このような研究文脈において、申請者はカントの様相概念の理解において、クリプキによって大きく進展した現代の様相論理、その認識論的な発展である認識論理、そしてその形而上学的な展開相である様相形而上学の三つの観点を援用してカントの著作を分析することを方法として採用した。

なお、本研究では分析的カント解釈という研究方法を採用したが、研究の資料としてはカントの理論哲学における主張著作である『純粋理性批判』（1781/87）だけではなく、後年刊行された『論理学』や、その前提となった「論理学講義録」、そして「形而上学講義録」に見られるさまざまな様相についての議論を渉猟していく、文献学的な検討の方法も重視した。

４．研究成果

2022 年度から 2023 年度の二年間にわたる本研究課題の論点は、年度毎に二つの論点に分けられている。つまり、一年目の 2022 年度はカントにおける様相概念を形而上学的な論点として議論してきた。その後、二年目となる 2023 年度にはカントの様相概念を認識論的な観点から再検討することを試みた。特に、2023 年度にはそれらを総括することを目指して、カントは様々な概念について繊細な区分を提示することが多いのに、なぜ様相については上述のような曖昧性を容認しえたのかについて可能な解釈を提示することを目指した。

2022 年度は、様相形而上学に注目することで、カントにおける可能的対象の存在論的な性格について検討した。より具体的に言えば、彼の可能的対象についての形而上学的な態度が、今日でいう現実主義的なものなのか、それとも可能主義的なものなのかという対比を用いてカント哲学を再建とした。それと同時に、初年度は現実性が指標的であるというルイス以降の現実性理解がカントの場合にはどのように反映されているのかについて考察を深めた。研究成果としていえば、この年度には、研究論文として繁田歩（2022）:「カントにおける現実性の指標性について」、『早稲田大学大学院文学研究科　紀要』、第 68 輯、pp. 55-69.が発表された。この論文では、カントと現実性様相の「指標性」との関連性を検証した。通常、カントの現実性様相は唯一無二の現実世界だけを指示すると考えられるが、カテゴリーとしての現実性は、認識主観の感性的構造に依存して多様性を持ちうること、つまり指標的でありうることを提唱した。なお、この研究は、研究発表会では、「「たったひとつ」だけど「たくさん」の世界―様相形而上学からみたカント哲学」、RC Symposium on the Humanities 2023 年 3 月 29 日で発表された研究発表をもとに展開している。

2022 年には、さらにカントの可能的対象についての取り扱いについての様相形而上学的な考察も進められた。具体的な成果としては、「存在述語の様相形而上学的分析」、2022.7、早稲田大学哲学会春季研究フォーラム（早稲田大学）という研究発表が行われた。この発表では、様相形而上学を大別する可能主義と現実主義という二つの立場が、バーカン式についての解釈にみられる相違に還元できることを踏まえて、これをカントの記述に落とし込んで再検討した。この研究では、Stang のようにバーカン式を否定する現実主義の解釈と、Rosefeldt のようにバーカン式に好意的な解釈を提示した可能主義的な解釈がカントにおいて両立しうることを確認した。なお、2022 年度には研究補助者を雇用することで、研究資料の調査などを効果的に遂行した。その成果としては、今回の研究ではほとんどふれられなかったカントの実践哲学における様相概念の意義についてのサーベイを得ることができた。

本研究課題の二年度目となる 2023 年度には、カントの様相概念を認識論という文脈において再検討することを目指した。その準備として、2023 年 3 月に「カントにおける様相概念と認識論」という題目で桜美林大学哲学セミナーにて研究発表を行った。この研究では、カントの様相論が認識論的な含意をもつようになる「真とみなすこと」という概念に着眼し、これを様相論理の基本的な概念である可能世界への到達可能性という観点から説明することを試みた。2023 年の 9 月にはカントにおける認識論と様相の概念が交差する重要な論点である「真とみなすこと」について、この分野で歴史的な研究を行ってきたミラノ大学の Mileti-Nardo 博士と研究会を開催することで、カントにおいて信念が知識になるということ、つまり認識的現実性が必然性へと変異するという事態について理解を深めることができた。

以上の研究成果を通じて、本研究ではカントが論理的な様相の概念を、現存在との関連では形而上学的な論点に重複させる一方で、真とみなすことと関連では認識論的な論点に組み入れていることを明らかにすることができた。最後に問題となったのは、カント哲学はなぜこのような論点の重複を許容しえたのかという問いであった。この問題について接近したのが、2023 年に学術雑誌『フィロソフィア』に掲載された論文「批判哲学という特殊が学についての一考察」である。この論文において申請者は、カントの超越論的論理学という特殊な思考法において、論理・認識・存在はともに支えあう、いわば「鼎立」の関係にあるという理解の可能性を提示した。これまで見てきたような論理-存在論的な様相論の文脈と、論理-認識論的な様相論の文脈を見分けることは、様相概念の曖昧性に対応する重要な成果といえよう。そのうえで、それらの相互関係を批判哲学の特色として認めることができるならば、本研究はカントの様相概念の特色について今日から見てもわかりの良い説明を与えることのできる手がかりを得たことになるだろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 繁田歩	４．巻 111
２．論文標題 批判哲学という特殊な学についての一考察	５．発行年 2024年
３．雑誌名 PHILOSOPHIA	６．最初と最後の頁 51-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 繁田歩	４．巻 68
２．論文標題 カントにおける現実性の指標性について	５．発行年 2023年
３．雑誌名 早稲田大学大学院文学研究科紀要	６．最初と最後の頁 55-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 繁田歩
２．発表標題 存在述語の様相形而上学的分析
３．学会等名 早稲田大学哲学会春季研究フォーラム
４．発表年 2022年

１．発表者名 繁田歩
２．発表標題 カントにおける様相概念と認識論
３．学会等名 第二回桜美林哲学セミナー
４．発表年 2022年

１．発表者名 繁田歩
２．発表標題 「たったひとつ」だけど「たくさん」の世界ーー様相形而上学からみたカント哲学
３．学会等名 第一回RC人文学シンポジウム
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
Kant and Modality	2023年～2023年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関